

## 家族を「みとる」ということ

宮古高等学校 鳥居 紗季

昨年五月、母方の祖母が亡くなりました。九十歳でした。

一般的には、「天寿を全うした」とか「大往生」という言葉がふさわしいのかも知れませんが、認知症の祖母との八年間にも及ぶ介護生活は筆舌に尽くし難い壮絶なものでした。

祖母の介護の様子は、何度か作文にしたことがありました。その度に、改めて母の苦労や祖母と向き合うことへの大きな「気づき」となりました。

祖母が亡くなって数ヶ月後、悲しみが少しずつ癒えた秋の初め、父方の祖父が腰の怪我が原因で立つことも歩くことも困難になり、それまでしていた買い物や通院に、介助が必要となりました。祖父は、七十五歳で祖母と田老で二人暮らしをしています。運転のできる祖父は、車でどこへでも出かけ、定年退職後は、祖母とドライブへ出かけることが何より楽しみでした。遠出をした時は、お土産を届けてくれる優しい祖父でした。

祖父の家は、築百年近く経つ古い家で段差も多く、バリアフリーとは程遠いので、トイレや入浴などは、祖母の介助が不可欠です。高血圧症の祖母は、毎日の介助が難しくなり、父と母に相談しました。

父の仕事は航海士で、数ヶ月に一度しか家には戻りません。一人っ子の父に代わって祖父の介護は、必然的に母が担うことになりました。

亡くなった祖母の介護で、さまざまな手続きなどは心得ていた母ですが、短期間のうちに再び介護をすることになるとは思っていなかったようです。

介護認定の手続きやスロープの設置などやらなければいけないことが山積です。母は段取り良くその一つ一つの解決に努めていました。

祖父は、週に二回デイサービスに通うことになりました。入浴や軽い運動、工作などもしているようです。クリスマスツリーやお正月飾りなど器用に作っては持ち帰っています。

母は、買い物や銀行への用事を週に数回頼まれています。雪が降った時は、雪掻きをするために車で二十分もかけて出かけます。

今の所、祖父母の様子は落ち着いています。歩行が困難という以外は、認知症や内科的なトラブルはありません。

しかし、いつそういった状況になってもおかしくはないのです。祖母は、亡くなる直前、心筋梗塞や脳梗塞を発症し入院を繰り返していました。容体が悪化する度に何度も呼び出され、亡くなる数ヶ月は、外出することもできず、緊張感を持った生活を毎日送っていたように思います。

「家族なのだから・・・」と、病院の方に言われる度に、重苦しい気持ちになることも度々ありました。

出口の見えないトンネルを長い間歩いているようで不安な毎日だったことを忘れることができません。

「福祉」って何だろう。漠然と考えることがあります。辞書には、「満足すべき生活環境」とありました。

福祉のサービスを受ける側の満足は保障されていてもその人を支える家族のことはないがしろにされがちのように感じます。双方の満足感がなければ長期にわたる介護生活をのりきることは難しいと思います。

では、日本以外の国はどうでしょう。インターネットや本などで調べてみました。「終末期医療」という言葉が飛び込んできました。欧米では以前からある医療法の一つですが、日本では、いろいろな問題を含んでいるようです。

延命こそが使命だと考える医師も少なくないようです。

一人一人の生き方がそれぞれ違うように、死についての思いや考えも違うはずなのに、未だに選択肢が限られていることは残念でなりません。

日本と欧米を比較してみると、欧米では、幼少期から「生と死」について、それぞれの年齢に応じた教育がなされていて、意見交換も頻繁に行われているそうです。

選択と決定するための知識を持たなければ恐怖を感じることも当然のことです。

祖母の死を踏まえ、私達はもっとしっかりと知識で祖父母の介護に関わりたいと考えています。

祖父母にも自分達は、どう老い、どんな終末を迎えたいかをきちんと話し合う機会を積極的にもちたいと思います。

私は将来、医療に関わる仕事に就きたいと考えています。

一人でも多くの人が正しい知識で理想とする終末を迎えられる一助になれるような人間になりたいと思います。